

日本におけるボート競技の起源に関する研究

古 城 庸 夫 (江戸川大学)

1、はじめに

明治期から今日まで、ボート競技の書物が数多く刊行されている。しかしそれらの多くは技術的な内容が主で、ボート競技の起源をイギリスに求めている場合が多い。

はじめて学生以外の日本におけるボート競技の起源に触れたのは、昭和12年(1937年)に大日本体育協会から刊行された大日本体育協会史下巻の日本漕艇協会史(宮木昌常、編集担当委員・日本漕艇協会役員・早稲田大学ボート部出身)であろうと思われる。

この大日本体育協会史を参考にして、慶応大学ボート部出身で時事新報社の宮田勝善(日本漕艇協会役員)が昭和32年(1957年)に発行したのがボート五十年であろうと思われる。

したがってボート五十年によれば、

「このボートをわが国で、スポーツとして最初に利用したのは、長崎在留のオランダ人と言われている。しかしこれも口伝で、正確なことはわからない。今日、記録として残っているのは、横浜開港間もない慶応二年、横浜市山下町十二番地の海岸通りに、バージというボートクラブがあって、英本国から取り寄せた数隻の滑席艇をもっていたのが、最初といわれている。」

と書かれているが、文中にも口伝とあるようにボート競技の起源は明確には明らかにされていない。

そこで本研究では、新たに発見された資料から日本のボート競技の起源について明らかにすることを目的とする。

2、 既存記録の検証と資料の発見

また昭和34年(1959年)日本体育協会から発行されたスポーツ八十年史のボートの歴史によれば、草分け時代として

「日本でボートを漕いだのは、なんといっても海軍と在留外人が初めてのようである。横浜のアマチュア・ローイング・クラブなどはずいぶん古い時代からあって、その組織もかなり完備していたようである。」

と述べて口伝の域を出ていない可能性を示している。また昭和41年(1966年)に宮田勝善によって書かれ、時事通信社から発行されたボート百年の日本のボートの起こりによると、

「日本で最初にボートを漕いだのは長崎在留のオランダ人だという。ヨットや、四人漕ぎ滑席艇を母国から取り寄せたというが、正確な記録は残っていない。

記録的に最も古いのは、慶応二年(1866年)横浜市中区山下町12番の海岸通りに、イギリス人が中心となり、本国から持ってきた数隻の滑席艇で、バージ・クラブを創ったことで、これは横浜アマチュア・ローイング・クラブ(Y・A・R・C)の前身である。」

と、これまでに発行された本と同じように明確にされていないのである。

したがって、ボート百年が書かれた昭和41年(1966年)以降に書かれた、日本の体育史やスポーツの歴史について書かれた本の中にはボート百年からの引用と思われる記述が目立つようになっていったと思われる。

そして昭和51年(1976年)に宮田勝善により改定新版として発行された、ボート百年の記述もボート50年と同じような記述で新たな事柄は述べられていない。

このように日本のボート競技の始りについて書かれた多くの著作について再考すると、ボート競技そのものの捉え方に矛盾があるのではないかと思われる。

それは今日のボート競技に対する認識が、競技用に特別に作られた艇とオール（櫂）を用いて2000mのタイムを競いオリンピック大会などでも行われるボートと、公園及び海浜あるいはお濠などの水空間に見られるような娯楽的ボートの違いを踏まえて考えられていないからではないだろうか。

つまり一般的に呼ばれているボートとは、人と物をオールという道具を使って運ぶ小型の舟であるボートと、決められた距離を開発された艇とオールで進みタイムを競う競技であるボートへと分化していったのではないかと考えられる。

それは幕末の日本を訪れた艦艇が使用していたボートと、外国人居留地に住むイギリス人などを仲介として、すでにイギリスで誕生し諸外国でも行われるようになっていた競技用のボートを本国から取り寄せて、漕ぐようになった競技用のボートが幕末の前後に存在していたのではないと思われるからである。

このことは当時の日本に、それらを表す的確な訳語が誕生していなかったであろうことも合わせて、レガッタという言葉と同じようにヨットや櫓を漕ぐ和船などの他種目の水上競技が距離などの条件を変えて同じ大会で速さを競い合うという試合内容を出現していったと思われるのである。

したがってこれらの認識の違いによる影響は、平成7年（1995年）に日本漕艇協会（現日本ボート協会）から発行された漕艇75年に書かれたわが国最初のボートという項目にも見られる。

「日本で最初にボートを漕いだのは長崎在留のオランダ人だと伝えられるが、正確な記録は残っていない。確かな記録に残るものは、慶応二年（1866年）横浜・山下町の海岸でイギリス人が中心となって、本国から持ってきた数隻の滑席艇で、バージ・クラブを創立したのが最初とされ、さらに最初のボートレースとして記録されているのは、明治2年（1869年）4月英国ビクトリア女王の誕生日を祝う記念レースである。この競漕は横浜に停泊中の英国軍艦の水兵たちの間で争われたという。」

つまりこの記述によれば、日本でボートを最初に漕いだのは長崎在住のオランダ人だと伝えられている。競技用の滑席艇を漕いだ記録の起源は、慶応2年（1869年）であろうと思われる。また最初のボートレースとして記録に残されているのは、明治2年（1869年）4月であるとされているが、水兵によるレースに使用された艇の種類が書かれていない以上、厳密には競技用のボートを用いた最初のボートレースとは考えにくいと思われる。

また、当時日本には多くの外国人居留地の存在していたことがわかっているが、築地外国人居留地（川崎晴朗著）にはボート競技関連の記述を見出すことが出来なかった。

そのため他の外国人居留地について書かれた文献を求めたが昭和63年（1988年）初版発行の長崎外国人居留地の研究（菱谷武平著）の中にもボート関連の記事を見出すことは出来なかった。

そこで他の居留地関連の文献を調べたところ、昭和51年（1976年）に初版発行された居留外国人による・神戸スポーツ草創史（棚田真輔著）のなかに

「明治3年（1870年）香港から神戸に来て医療会館を築き、リーウェリン商事会社に加入したA・C・シム（Alexander・Cameron・Sim）が、スポーツ活動と社会活動を含めたようなクラブが必要であると考え、イギリス人の同僚とアメリカやドイツ人などの協力を得て、同年9月23日にKobe・Regatta & Athletic Club（KRAC）を創設した。またKRACは同年12月24日にボートハウスと体育館の落成式を挙行し、第1回のレガッタ競技を開催して、神戸での外国人によるスポーツ活動を華々しくスタートさせた。」

との記述を発見したが、明治3年（1870年）に行われたレガッタで、ボート競技の種目が行われたことを特定することは出来なかった。

しかし文中には

「明治4年（1871年）には横浜に遠征し、横浜にあった横浜レガッタ競技クラブ、ニッポンレガッタ競技クラブと対抗し、神戸は4試合に負けたが、ハンデーなしの競技では、ニッポン競技クラブには軽く勝った。」

と書かれており、明治4年（1871年）には横浜で神戸・横浜インターポート・レガッタ競技会が開催されたことが判明した。

このことが昭和52年（1977年）に初版発行された居留外国人による・横浜スポーツ草創史（山本邦夫・棚田真輔共著）と平成16年（2004年）1月発行の神戸外国人居留地研究会年報・居留地の窓から第4号の発見につながり、横浜や神戸、長崎における外国人居留地でのスポーツ活動の中でもボート競技の起源について、より詳細な事柄を明らかにすることが可能になったのである。

3、長崎におけるレガッタの起源

長崎でのボートについては、先述のイギリス人ジャーナリストのジョン・レディ・ブラックは慶応元年（1865年）すでにボートやヨットのレースが居留地外人の娯楽とされていたと述べている。

そして横浜以外の居留地として、長崎で文久元年（1861年）9月26日火曜日に長崎レガッタが行われたことを伝えている。

J・C・ブラックによれば、その大会の内容は以下の通りである。

- 1、 大浦レース・・・ヨーロッパ人4人漕ぎボート。距離1、5マイル
参加費5ドル、賞金25ドル、優勝と第2位のボートに懸賞
- 2、 九州レース・・・日本船によるハンディーレース。距離1、5マイル
優勝15ドル、第2位5ドル、第3位2ドル
- 3、 長崎カップ・・・男子による4人漕ぎボート。距離1マイル
参加費5ドル、優勝カップ 総合優勝に75メキシコドル
- 4、 自家製の屋形船レース（ハンディーレース）
距離1マイル、参加費飛び入り5ドル、応募者2ドル
優勝20ドル、第2位10ドル
- 5、 長崎カップ・・・シングルペア 距離1マイル、参加費3ドル
優勝30ドルとカップ
- 6、 人々レース・・・日本支那製以外によるハンディーレース
距離1、5マイル、参加費5ドル、優勝25ドル
第2位10ドル、第3位5ドル
- 7、 帆船レース・・・各種の帆船による3隻ごとのレース
距離は役員が2マイル以下で決める。参加費5ドル
優勝30ドルとカップ
- 8、 イナカレース・・・日本人の4人組によるハンディーレース
距離1マイル、参加費飛び入り5ドル
応募者2ドル、優勝20ドル、第2位10ドル

またこの長崎レガッタでの詳しい成績は残っていないが、元治元年（1864年）に行われた4～6人までの漕手による長崎カップの時は、ホルム・リンガー商会（Holme・Ringer & Co）を創設したF・ホルムらが優勝し、長崎カップの快走舟のレースではT・B・グラバー（T・B・Glover）と弟のA・J・グラバー（A・J・Glover）の兄弟が優勝した。

また（居留地の窓から）の種目説明とこの長崎レガッタを比較した場合、横浜での4本オールレー

スは（１）の大浦レースと（３）長崎カップの４人漕ぎボートと同じような表現に思えるが種目の特定はできなかった。

４、新たな資料の発見

これまでの研究で、文久元年（１８６１年）９月２６日火曜日に行われた長崎レガッタが、慶応２年（１８６７年）に横浜山下町十二の海岸通りでバアージクラブがスライディング・シートのボートなどを横浜居留地の外人たちが漕いだといわれていた事実よりもボート競技の起源としてはふさわしいと、考えられるが、前述のようにボート競技の種目が特定できなかったため推測の域を出なかった。

しかしこのたび発見したヨコハマ・アマチュア・ローイング・クラブ １８９９年 明治３２年第１４回AUTUMN REGATTA 大会番組とヨコハマ・アマチュア・ローイング・クラブ １９００年 明治３３年第２６回SPRING REGATTA 大会番組を詳細に検討した結果、ダブル・スカルの種目は、Double Sculls種目でBow（先頭のポジション）Stroke（整調）のポジションが確認できたためボート競技のダブル・スカル種目と確認できた。

さらにPairsという種目では、Bow（先頭のポジション）、Stroke（整調）、Cox（号令掛）のポジションが確認できたので、ボート競技の舵つきペア種目と確認が出来た。

またFoursという種目では、Bow（先頭のポジション）、２（２番目のポジション）、３（３番目のポジション）、Stroke（整調）、Cox（号令係舵手）の記載が認められたため、ボート競技の舵つき４の種目と確認できた。

また第２６回（１９００年）スプリング・レガッタには神戸レガッタ&アスレチック・クラブと、横浜アマチュア・ローイング・クラブとの対抗戦も認められたことでこれらボート競技で使われていた用語の普遍性も確認できたと思われる。

したがって、この２つの大会番組（プログラム）の発見により、日本におけるボート競技の起源としては、文久元年（１８６１年）９月２６日火曜日に行、われた長崎レガッタがふさわしいと考えられる。

５、まとめ

以上のような既存記録の検証と新しい資料の発見により、横浜外国人居留地におけるボートレースの起源と長崎におけるレガッタの起源について検討を行ってきた結果、いままで記録として残されていたものの中で、ボートレースの起源の年代については、修正が必要ではないかと考えられる。

すなわち、ボートレースの起源は、明治２年（１８６９年）５月２４日横浜でイギリス水兵により行われた英国ビクトリア女王の誕生日を祝う記念レースよりも、文久元年（１８６１年）９月２６日火曜日に行われた長崎レガッタが相応しいと考えられるのである。

しかし上海ローイングクラブなどのその他の居留地におけるボート競技の活動内容及び他のレガッタの詳細については今後の研究を待たなくてはならない。

参考文献

- 日本体育協会編発行 スポーツ八十年史 １９５９年 p 247 p 845
宮田勝善 『ボート百年』（時事通信社 １９６６年）p 93
社団法人日本漕艇協会発行 『漕艇75年』 １９９５年 p 12
棚田真輔 『神戸スポーツ草創史』（道と書院 １９７６年）p 15 p 27 p 28
山本邦夫・棚田真輔『横浜スポーツ草創史』（道と書院 １９７７年）p 105 p 107 p 112
高木應光監訳 長谷川美美子翻訳 『ハロルド・S・ウイリアム著 神戸レガッタ・アンド・アスレチック・クラブ百年史』 神戸外国人居留地研究会年報 『居留地の窓から』第４号 2004